

近年、理学療法の対象範囲が広がっているにもかかわらず、現場では、研修と診療の両立により入職後短期間で知識・技術の習得を図る継続教育を余儀なくされている。現在は、学術団体や大学等のさまざまな研修システムを活用しつつ、現実的には各職場の創意・工夫に委ねられているのが実情である。スペシャリストとジェネラリスト、相対する言葉があるが、理学療法士はその両方を兼ね備え、幅広い視野で理学療法のプロフェッショナルをめざす必要がある。そこで本特集では、各分野で取り組まれている継続教育の実態について述べていただき、継続教育のあるべき姿を模索する機会とした。

■理学療法士の継続教育の取り組み(植松光俊, 他論文)

高い臨床実践能力を有する者を認定理学療法士とするなら、その制度が質量ともに外部評価に耐え得ることが不可欠である。また段階的な学習計画を提案し、継続的な学習を支援することも必要である。一方で、学び続けられない者が国民の健康に資することはなく、学び続けることなく患者(利用者)の前に立つべきではない。自浄機能を働かせるためには日本理学療法士協会主導型の実質的免許更新制が効果的な手段であると考えている。

■理学療法士の継続教育における教育機関の役割(臼田 滋, 他論文)

理学療法士の教育には、プロフェッショナル教育が重要であり、生涯を通して学習を有効に継続するためには、自己主導的で、成熟したメタ認知を有し、省察を活用できる望ましい学習者像の形成が求められる。医療施設における継続教育の現状には改善すべき点も多く、卒前および卒後教育において、教育機関による生涯学習に対する支援が果たすべき役割は大きい。

■各分野での継続教育のあり方

1. 中枢神経疾患分野のプロフェッショナルを育てる(高橋明美論文)

中枢神経疾患分野のプロフェッショナル育成について、卒前教育、卒後教育、生涯学習に分けてまとめた。卒前教育においてはコンピテンシーに基づいたカリキュラムの編成が重要であり、到達目標を設定して進めていく必要がある。卒後教育ではevidence based physical therapy (EBPT)に視点を置いた取り組みが重要であり、専門理学療法士制度の強化や卒後研修制度の義務化を検討していく必要がある。これらは系統的教育でなされなければならない。

2. 整形外科疾患分野のプロフェッショナルを育てる(福井 勉論文)

整形外科疾患のプロフェッショナルはさまざまな指針の遵守だけではなく、動作の読み取りの感受性が高い。知識に基づく技術レベルが高いだけではなく技術的判別性に優れている。また評価内容自体をも開発していくスタイルを有し、類推から抽象化するプロセスに優れている。さらに優れた臨床家はメタ認知に優れ、利他的で、創造性に富み、グローバル対応可能で高いコミュニケーション能力を有するという特徴をもつ。

3. 循環器疾患分野のプロフェッショナルを育てる(神谷健太郎, 他論文)

循環器疾患に対するリハビリテーションは先進的な施設でのみ行われる治療ではなく、標準治療の一環としてすべての患者に適応を検討すべき治療の一つとなっているが、整形外科疾患や脳卒中に対するリハビリテーションと比較して普及率は極めて低い。本稿では、本分野におけるプロフェッショナルの育成について、臨床および研究の側面から述べ、北里大学における取り組みを紹介した。

4. 呼吸器疾患分野のプロフェッショナルを育てる(高橋仁美論文)

呼吸器疾患分野のプロフェッショナルとしての課題は、呼吸理学療法独自の体系をつくり上げ、科学として成立させることであると考えられる。このプロフェッショナルの追求の流れのなかに生涯学習が存在し、自身の資質の向上を通じて自己実現を図るための自己研鑽が大切となる。プロフェッショナルを育成するためには、理学療法士一人ひとりの「自らが成長していく」という姿勢を支援し、その成長を強化するための環境設定が重要である。

5. 在宅理学療法のプロフェッショナルを育てる(小山 樹論文)

在宅領域は常に変化し、教育体制は十分とは言えない。理学療法士にはフィジカルアセスメントスキル、対人スキル、コーディネートスキル、経営スキル、地域のインフラにつなぎインフラを創造するスキルが必要である。「安全に生活することを支援できる」、「高い技術・知識を提供することでより良い生活を継続して送れるようにできる」、そのうえで「人にとっての特別を創り出し感動を与えられる」プロフェッショナルを育てる必要がある。